

令和5年度 金沢型学習スタイル実践推進事業 報告書

南小立野小学校	重点課題 推進校	学習形態の工夫
---------	----------	---------

1 研究の重点と具体的な取組

研究テーマを「ともに生きる子をめざして～認め合い、学びを深める～」とし、子どもたちがわかった！できた！そして深まった！が実感できるよう、学習形態を工夫して授業を進めてきた。「自己の学びの変容に気付くことができる学習形態」に重点を置き、国語科・算数科に絞って、系統性を持たせ、6年間を通しての学びの深まりを実現させることを目標に研究を進めてきた。

算数科

- 1年生…ペアナビシステム（話し手ナビゲーションと聞き手リアクション）で説明



全員が自分の考えをブロック操作で表したり、友だちの話を聞いて理解を深めたりするための学習形態

- 3年生…一斉ナビシステム（話し手1人に対して、その他全員が聞き手となる）



話し手（ナビ）の言うとおりに、聞き手（リア）が操作することで、話し手の正確性を引き出すための学習形態

- 6年生…①ペアナビシステム→②一斉ナビシステム

①話し手（ナビ）の言うとおりに、聞き手（リア）が操作することで、自分の考えとは違う考えを理解するための学習形態

②話し手1人（ナビ）の言うとおりに、聞き手1人（リア）が板書上で操作することで、共通理解したい本時のねらいを理解するための学習形態

国語科

- 2年生…付箋を活用したペア学習



自分の考え（根拠）を持ってペア交流するための学習形態

- 4年生…自分の考えを再構築するための色付箋を使ったグループ学習



他者からの学びを2色の付箋で表すことで、学びの変容を視覚的に捉えるための学習形態

- 5年生…他グループの話し合いの様子を観察し、気づきを付箋で交流するグループ学習



お互いの学習を客観的に評価し、高め合うための学習形態

2 取組の検証

算数科で系統的に取り組んだ「ナビシステム（話し手と聞き手の役割をもたせる）」は、どの学年においても効果的であった。低学年の取組では、ペア学習にすることで発言の機会を保障し、何度も説明するうちに自分の考えに自信が付き、全体交流に意欲的に臨むことができた。中学年の取組では、一斉交流の中に「ナビシステム」を取り入れることで、話し手側の説明を、聞き手側が操作することで、間違いや思考のズレを全体で共有しながら、説明を洗練させていくことで、より思考力や表現力を向上させたり学びを共有したりすることができた。

国語科で系統的に取り組んだ「付箋の活用」も、どの学年においても効果的であった。低学年では、根拠のある自分の考えを持つことで、学びのあるペア交流をすることができた。また、自分の考えの付箋と交流で得た考えの付箋の色を変えることで、学習前後の変容に気付くことができた。中学年では、交流で得た考えを「自分の考えに付加したもの」「付加しないが納得できたもの」に色分けした付箋に記すことで、自分の考えを再構築する際、視覚的に捉えられた。

高学年の取組では、教科を問わず、児童と交流の目的を共有した上で活動することで、学習形態によって自分の考えを明確にしたり、新たな考えに触れたりし、自分の考えを再構築することによって、他者や自己の学びの変容に気付くことができた。

3 成果と課題

成果

- ①算数科でのナビシステムの活用は、知識・技能を高める手立てとなるだけでなく、思考力・判断力を高める手立てとなる学習形態である。特にペア学習で、相手の思考したことを推測しながらリアクションすることで、自他の考えを比較したり、自己の考えを再構築したりすることができ、「自己の学びの変容に気付く」ための効果を発揮する。
- ②国語科での付箋の活用は、特に付箋の色に発達段階に合わせて意味を持たせることで、他者の考えを取り入れたり、自他の考えを比較したりなど、自己の考えを再構築する際に視覚的に捉えることができ、「自己の学びの変容に気付く」ための効果を発揮する。

- ③学習形態の工夫により、児童アンケート「交流することで、新しく気づいたことがある」の肯定的回答の値が徐々に上がってきている。

児童アンケート 「交流することで、新しく気づいたことがある」	
調査月	肯定的回答 (A+B)
4月	78.6 (A49.7)
7月	83.4 (A39.0)
1月	85.0 (A36.0)

課題

今年度の研究から、算数科国語科どちらの教科においても、また、どの学年においても、ねらいや目的意識（交流の視点）を児童と共有することが、効果的に交流する上で必須であることが明確になった。言い換えるならば、児童が自分事として必要感を持って交流しなければ、効果は得られないということである。

次年度は、今年度の課題から、「教師と児童が目標を共有する『学習評価』」について研究を深め、児童が「自らの学びを調整」しながら主体的に学びに向かうことができるよう研究を進めていきたい。そして、めざす「認め合い、学びを深める子」の姿にせまりたい。